

「若い」という言葉

坂本, 勝

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

57

(開始ページ / Start Page)

191

(終了ページ / End Page)

191

(発行年 / Year)

1998-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020017>

通信 そとぼり

No. 35

「若い」という言葉

坂本 勝

「若きわれらが命の限り ここに捧げて愛する母校」。言うまでもなく法政の校歌。普段はほとんど忘れていたが、入学や卒業の季節になると何となく新鮮な感じで思い起こす。昭和四年に法政の予科に作文の講師として赴任した佐藤春夫が、翌年、学生中心に組織された校歌制作委員会の依頼で作詞を担当した。ただこの歌詞に決まるまで作曲者の近衛秀麿との間で論争があり、多少の曲折を経て現在の歌詞に落ち着いたという。引用部の「命」も初案では「血潮」だった（『法政大学の二〇〇年』）。定型を踏んだいかにも校歌らしい歌詞だが、学生の頃は「そんなに若くもないのになあ」という気分で、大声で歌うのは気恥ずかしい感じだった。もともと「若い」という言葉は、青年の活気に満ちた様を表すほかに、古くは生まれたばかりの幼年や未熟さという場合の方が多い。

国稚く、浮きし脂の如くして、クラゲナス漂へる時、葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、ウマシアシカビヒコヂの神。（『古事記』）

古事記冒頭の、古代大和の人々が育んだ創世記では、大地が固定化する以前のどろどろとした様子を「稚し」という。ただしそれは未熟ではあるけれども、早春の水辺に芽ぶく若葦の、生い立つ生命の兆しを孕んだ新生の光景でもある。春の到来とともに古い一年が死に新たな一年が誕生する。そうした死と再生の円環的な時間の初発に出現するのが「若き」姿なのである。それは時間の節目節目に再生し、自然や人間に生氣をもたらす。正月に飲むめでたい水を「若水」といい、初春に摘んだ生命力に富んだ菜を「若菜」といったのも同じ発想による。

現代の私達には、若さは人生の中で一回的に過ぎ去ってしまうものだという感じがある。勿論そうした直線的に迫ってくる時間の重みには抗し難いものがある。ただそれとは別に、いやそれと同時に、人生の節目に繰り返し誕生する若さの驚きに素直に身を任せる瞬間があってもよいのではないか。入学や卒業も古い自分に別れを告げて新しい自分を再生させるための一種の通過儀礼だから、「若きわれら」に気恥ずかしさを感じることはないのである。自分の中に若さを感じたときはまた、新たな力が「湧く」時でもある。でも力瘤を入れる必要などはない。今胸によぎる微かな期待と不安。それをありのままに見つめることが若さの証だと思う。（文学部助教）